

2021年4月5日

経済地理学会会長
松橋 公治 殿

経済地理学会賞選考委員会
委員長 伊藤 達也

第10回経済地理学会著作賞 受賞候補者の推薦

経済地理学会賞選考委員会は、経済地理学会著作賞内規にもとづき、以下の通り候補者を評議会に推薦することを決定致しましたので、ここにご通知申し上げます。

選考結果

候補者名：立見淳哉

受賞著作：『産業集積と制度の地理学：経済調整と価値づけの装置を考える』（ナカニシヤ出版、2019年、245ページ）

受賞理由：

本書は、経済地理学における産業集積の概念を踏まえながら、これまで議論されてきたイノベーション・ミリュー論による産業集積と制度との関係を明らかにしつつ、および我が国ではなじみの薄いとされるコンヴァンション経済学の知見に基づき、経済活動の調整と財・サービスの価値づけに作用する産業集積に関する新たな理論展開をはかったものである。

著者の4半世紀にわたる研究の集大成にあたる書物とも言え、著者が研究生生活を過ごしてきた期間には、制度論的経済地理学、進化経済地理学、関係論的経済地理学といった斯学の新しい潮流が形成されてきた。著者はこうした動きを渉猟してリアルタイムに受け止め、フィールドワークで得た知見と結合させてきた。8章からなる本書のうち、第2章から第8章までは既発表論文を基にしたものであるが、理論的部分にあたる前半の第2章から第4章までは大幅な加筆修正が施されており、学術書としての格調を保ちつつ比較的難解な内容を分かりやすく1冊の書物に編み上げている。

前半の理論的枠組みの検討は多少難解な部分はあるが、後半の分析は大変理解しやすく、かつ面白く、本書の価値を大きく高めている。とくに国内の児島アパレル産地の分析と海外のフランスのショレ・アパレル縫製産地の事例は、コンヴァンション経済学に依拠した「生産の世界」論に依拠した実証研究であり、さらにパリのファッション産業および富山県高岡銅器産業などの分析は財・価値づけに関する実証研究である。これらは、新たな産業集積の理論的な研究を裏付ける実証研究であり大変興味深く高く評価できる。こうした理論研究、実証研究を兼ね備えた本書は学術性に富んだ意欲的な労作だと言え、今後の産業立地論、経済地理学の進化に大きく寄与するものと思われる。

以上から、わが国の産業集積研究において新たな理論的研究と優れた実証研究から構成される本書の刊行は、経済地理学の発展に大きな足跡を残すと考えられ、経済地理学会著作賞を授与するにふさわしい作品であると判断できる。

経済地理学会賞選考委員会：伊藤達也（委員長）、小田宏信、平 篤志、千葉昭彦、西野寿章、
根岸裕孝